

土木屋の読書と旅(11)

令和2年7月

外出自粛でも旅をする方法はある。脳内旅行である。脳は放っておいては活性化しないし、無理に働かせると妄想・抽象化に走り、旅の気分は味わえない。脳内で疑似旅行体験を味わうためには適度に具体的な外部刺激をいかに脳へ与えるかの方法論（もちろん深刻な話ではなくて遊び方の話）が必要だ。

いちばん安直な方法はテレビの旅番組だ。ただし、安直なだけに番組を慎重に取捨選択する必要がある。ではどのような番組が脳内旅行には適しているのだろうか。私のTV旅番組への考えを話したい。

* * *

私はいわゆる「グルメ+旅行・探訪」番組に興味はない。『吉田類の酒場放浪記(BS-TBS:毎週月曜日)』という巷間の人気番組があるが、私にとっては、ただ胡散臭いハンチング帽のおっさんが東京近辺の飲み屋を紹介しているに過ぎない番組（*特番としての他府県出張編もある）に思え、東京人への飲み屋情報番組としては成立するが探訪番組としてはその場所が持つ風情、人情が私にはまったく伝わらないのでパスしたい。もちろん「飲・食」は人間の根源的な行為であるので旅番組といえども触れざるを得ないテーマであるが、旅番組での構成上の位置づけは番組の良し悪しを決めるキーポイントだと思う。

では、私の気に入っている番組は何か、「飲・食」のとらえ方が面白い番組を2、3紹介する。

* * *

■『六角精児の呑み鉄本線・日本旅(NHK BS プレミアム:年4回)』

鉄道マニアには「乗り鉄」「撮り鉄」いろいろなタイプがあるが、新しいジャンル「呑み鉄」の開拓者、俳優：六角精児の旅番組である。番組のタイトルは「本線」であるが、乗り継ぐ列車のほとんどはJR・民鉄の支線か第三セクター線、いわゆるローカル線だ。旅立ちの前に駅のコンビニで酒とつまみを調達。人もまばらなローカル線の窓際、まずは缶ビールをプシュッ。バック(BGM)にカントリー・フォーク調の主題歌が流れる。『♪走る列車のリズムに合わせ 缶ビールが揺れている / 窓の景色もそこそこに ああ 酔ってしまったな / 海岸線は故郷へ向かう道 負けたんじゃない逃げるんじゃないさ / ほんの少し弱くなっただけ / ♪(六角精児バンド:ディーゼル)』



昼間は、隠れた地元の酒蔵で試飲酒を一杯。夜は地元の酒と肴を求めて小料理屋、居酒屋、スナックなど好みの店を嗅覚よく見つける。その雰囲気や彼の著作（六角精児「呑み鉄」の旅:世界文化社）から一例引用、『能登半島第三セクター、のと鉄道での話:夜はもちろんスナック街へ。……店を探している



と、〇〇組と書かれた看板があり、同じビルに「大虎」というスナックを発見。いくら“入りづらいスナックがすき”とはいえ、さすがに〇〇組に「大虎」ときたら、かなり入りづらい。普通はそう思うけど、逆に興味がわいてきてドアを開けると椅子に座ったおばさんがひとり。菓子を食べながらテレビを見てた。…ぐでんぐでんに酔っぱらったオヤジのふたり。妙な客を横目に、地元の魚のみりん干しをつまみながら、おばさんママと3時間くらい喋ったのかな?パチンコ好きなママだったから「じゃあ、これで“一円パチンコ”でも打ってくれよ」少し多めに勘定を置いて店を出たような記憶があります。ちなみに、〇〇組というのは、地元の祭りのための青年団の事務所でありました』。もちろんこうした危なげなエピソードはNHKの番組には登場しない。しかし、ゆっくり流れる時間のなかで、『旅の目的は基本的にリフレッシュ。…忙しい毎日から抜け出し、酒を飲みながら日常では見られない風景を眺め、偶然に出会った人と語らったりしていると、自分の気持ちが変わっていくことを感じます。ストレスが取れ、身も

土木屋の読書と旅(11)

令和2年7月

心もリラックスしていく。そのあと、また仕事に臨んだ時、「さあ、もっと頑張るか」と、心のなかで呟く自分を感じることが多々あるんです。』という六角精児の考え方がよく伝わる番組である。

■ 『迷宮グルメ異郷の駅前食堂(BS 朝日：毎週金曜日)』

『それは遙か遠くへの独り旅…／ 日常生活からの逃避行／ 異世界への放浪の旅／／ ふらりと降りた駅前の／ 絶品グルメと人情を、／ 異郷で探すふれあいの旅』のプロローグから番組は始まる。旅する人はヒロシ。現地の人々に注ぐ視線はやさしい。

私自身、片言の現地語も中学英語も満足にしゃべれず、聞き取りもできなかったが、妙に気力と体力が横溢した20代に行った外国旅行のことを思い出す。多少の不安と、この先何があるのだろうかというワクワク感。テレビ番組ではあるがヒロシの地元の人とのふれあい方を通して、当時自分が体験した好奇心、感傷そして非日常感といった心の動きを再現している自分に気がつく。なぜそうなるのだろうか、彼の考え方の一端を紹介したい。

『一人で旅するように生きるからこそ、出会う人には丁寧に接していくべきだと思う。…丁寧に人と



ひとり生きていく

接するとは、相手の機嫌を取ったり、お世辞をいったりすることではない。そんな態度を取らずに、誰とでもフェアに接することだ。…(相手によって話し方を使い分け、誰に対してもぶっきらぼうな対応になりがち) そんな人にはひとり旅をすることを勧める。実際に旅をして、知らない道をスマホを使わず現地の人に尋ねてみる。間違いなく丁寧に接するはずで、コミュニケーションの仕方を直していくうえで有効な方法だと思う。(『ひとり生きていく』ヒロシ／廣済堂出版)』私の好みだが、ラテン系、中南米系もしくは東南アジア系の地方都市が登場する回が気分的にほっこりして面白くリラックスできる。



■ 『世界ふれあい街歩き(NHK BS プレミアム：毎週火曜日)』

バーチャルリアリティー感覚になれる番組。案内人なし、人の視線の高さで、歩くことを重視してカメラ(視聴者の視線)が動く。カメラが街角の人に話しかけていく、応えは現地語で返ってくる(日本語テロップ付き)。相手に勧められるままに路地に入り込み、路地裏2階の民家テラスから街を眺めることもたまにはある。世界の街をめぐることができるNHKならではの番組かもしれない。「飲・食」レポートに重きを置いていないのがよい。自動車優先ではない街路網を持つ世界各国の状況も体感でき、都市計画を勉強している人には興味深い番組だと思う。混沌としたアジアの町中は刺激的だが、登場する街区はNHK基準で厳選されており、怪しい場所は出てこないがそれはそれで楽しめる。



スペインの遺産が残るピガン: フィリピン

* * *

今回は脳内旅行・初級編で紙幅が尽きた。中級編は次回にしたい(諸般の都合により予告なく変更することがあります)。閉塞感漂う中でもその人なりにリフレッシュできる方法は必ずあると思います。

古谷 健